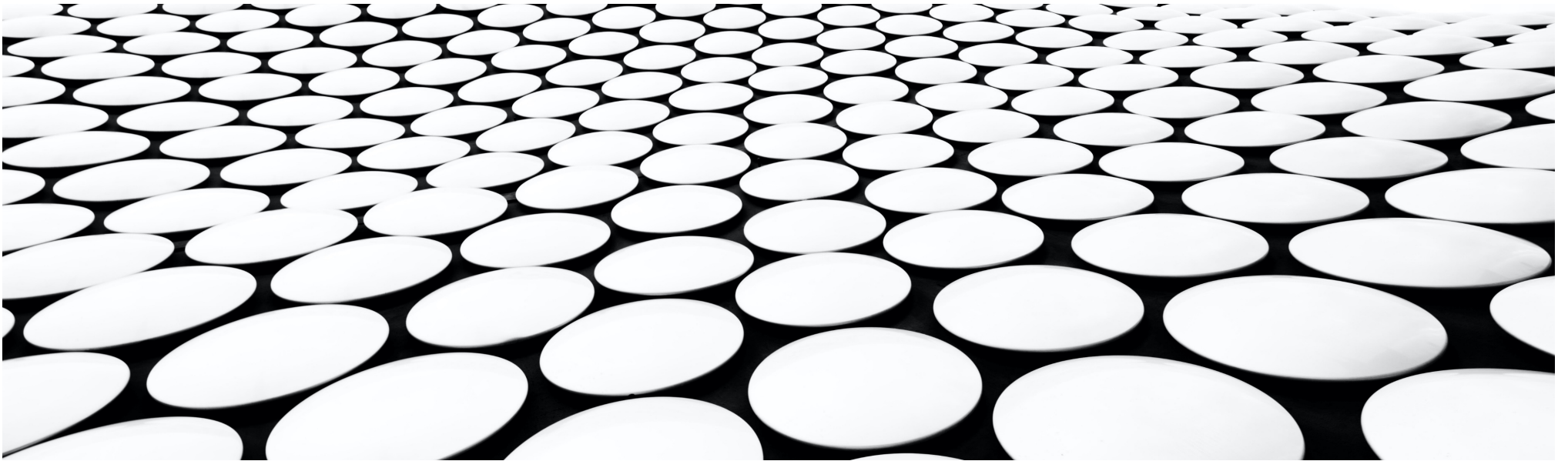

CHOOSE大学

公共性とは何か？

第2回 ソーシャル・メディアと公共性



CHOOSE大学 6月の講義内容

【第1回】メディアと公共性

【第2回】ソーシャル・メディアと公共性

【第3回】スポーツと公共性

【第4回】サブカルチャーと公共性

第2回 ソーシャル・メディア と公共性

目次

★前回のまとめと質問への回答

1. さまざまなメディアの特徴
2. 変わりゆく「公共性」
3. 「長い革命」のために

★質問への回答と前回のまとめ

★質問

①メディアが中立性を保つためには、構造が大事だと思います。政府が許認可を与える構造から脱却しないと始まらないのでは？まず、メディア自身が変革を望むくらいにならないと実現しないのではないのでしょうか？

②報道の自由度ランキングは下がり続けています。誰かの基準で評価される以上、偏りがあるとして無視する向きもありますが、ただ下がりしていることは少なくともよくない方向に進んでるのではないのでしょうか？どう向き合えばよいのでしょうか？

★ 前回のまとめ

伝統的 メディア

- マス・コミュニケーション
- **公共圏**とそこから排除される人々
- 排除による秩序と安定 ・ 高い志vs商業主義

オンライン メディア

- 双方向コミュニケーション
- 爆発的な参加の増加と断片化
- **公共圏の再構築**の必要性

1. さまざまなメディアの特徴



1 - 1 伝統的メディアの特徴

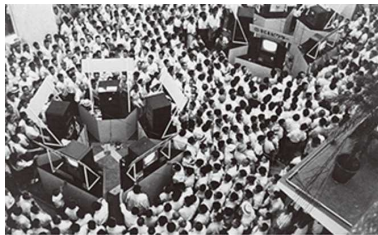
- 伝統的メディア＝新聞、テレビ、ラジオ、電話など
- マスに向けたコミュニケーション
- 政治的・社会的な情報＋商業システムからのメッセージを伝達する回路
- 「中心化された送信」と「プライベート化された受信」による公共空間での一方向的なコミュニケーション

★伝統的メディアの特性 (ホドキンソン 2016, 35)

デバイス	テクノロジー	媒体	リアルタイム性	フロー
固定電話	対人型メディア	音声	同期的	双方向的
新聞	マスメディア	文字・静止画	非同期的	一方向的
ラジオ	マスメディア	音声	同期的	一方向的
テレビ	マスメディア	動画・音声・静止画・文字	同期的	一方向的

⇒ 電話のみ特性が異なっている

★文献：テレビについて学ぶために



テレビジョン

テクノロジーと文化の形成

レイモンド・ウィリアムズ(著)
木村茂雄／山田雄三(訳)

Television: Technology and Cultural Form

ミネルヴァ書房

レイモンド・ウィリアムズ『テレビジョン』（原著1974年）
テレビ研究の古典的名著



テレビ・危険なメディア

ある広告マンの告白

ジェリー・マンダー
鈴木みどり 訳

ジェリー・マンダー『テレビ・危険なメディア』（原著1977年）
悲観主義的テレビ論



テレビを〈読む〉

ジョン・フィスク
ジョン・ハートレー
池村 六郎訳

未来社

ジョン・フィスク&ジョン・ハートレー『テレビを〈読む〉』（原著1978年）
やや楽観的テレビ論

1 - 2 新しいメディアの特徴 (ホドキンソン 2016, 37)

A) メディアの合体

「かつてのメディアには、それぞれ特有の能力と制約があったが、デジタル化はコミュニケーションのバラバラだった技術的可能性を1つに統合する。(略) さまざまなメディアが同じデジタル信号を使うため、かつてはバラバラだったテクノロジーどうしの親和性が高まってくる。」

⇒メディアごとのコンテンツを変換可能に！

B) 双方向性

「かつては対人型メディアでのみ可能であった双方向性と、何百万人もの人々が同じコンテンツにかかわれる技術とが、組み合わさった。（略）インターネットは、かつてないほどのコンテンツ利用の権限を、ユーザーに与える。」

⇒電話の特徴をバージョンアップ！

C) モバイル性（携帯性） + 常時接続性

時間と空間の制約をうけることなく、いつでもどこでも誰とでもコミュニケーションすることが可能になる。

⇒新聞やラジオの特性をアップグレード！

1 - 3 メディアの特性 (ホドキンソン 2016, 35 + 加筆)

デバイス	テクノロジー	媒体	リアルタイム性	フロー	携帯性
固定電話	対人型メディア	音声	同期的	双方向的	なし
新聞	マスメディア	文字・静止画	非同期的	一方向的	あり
ラジオ	マスメディア	音声	同期的	一方向的	あり
テレビ	マスメディア	動画・音声・静止画・文字	同期的	一方向的	なし
ソーシャル・メディア	双方向型メディア	動画・音声・静止画・文字・	同期的	双方向性	あり

-
- 新しいメディア = ソーシャル・メディア・プラットフォーム
「通常モバイルまたはウェブの技術を使い、利用者が生成するコンテンツの作成と交換を可能にするインターネットを使ったプラットフォーム」(サンスティーン 2018, 33)
 - 個人的でありつつ公共的でもある

例 : Facebook、Twitter、Instagram、Wikipedia、YouTube、
blogやVlogなど



https://ja.pngtree.com/freepng/social-media-icons-set-logo_3588882.html



2. 変わりゆく「公共性」



2 - 1 参加の爆発的広がり

市民参加の促進

- 双方向性・携帯性・常時接続性というインターネットの特徴は、市民参加を促進する。
- これまでは排除されてきた人々を巻き込みながら、社会的課題についての議論を活性化。
- 言論や討論を通じた新しい公共の空間や「公共性」が立ち上がりつつある。

物理的距離を超えた集合とコミュニケーションの可能性の拡大

- かつては政治的なアクションをおこし、討論するためには広場や街路に集まる必要があった。
- オンライン・メディアによって、物理的距離のある人たちがオンライン上の「フォーラム（公開討論会）」に集うことが可能になった。

新しいメディアによる意見の表明と一時的連帯

- ハッシュタグ政治 #BlackLivesMatter、#MeTooなど
- 同じ意見をもった人々と、「ハッシュタグ」と呼ばれる機能を使って連帯できる。
- コミュニケーションの回路が増えたことで、伝統的なメディアにおいてメッセージやコンテンツの送り手の立場から排除されてきたさまざまなアクターによる意見の表明が可能になる。

2 - 2 蝕まれる「公共性」

- ソーシャル・メディアのコミュニケーションとは＝「プライベートな送信とプライベートな受信」が「公共の空間」にあふれ出ている状態である。
- 「プライベート」の習慣や行動や発言が調整されることのないまま「公共の空間」に垂れ流されることで、私たちの社会とメディアがこれまで築き上げてきた「公共性」は蝕まれてもいる。

参加による断片化

- コミュニケーションの回路と参加が爆発的に増えたことで、共通の情報や体験というものが減少し、人々はむしろ断片化つつある。
- 「タイムライン」と呼ばれるシステムによって、私たちの見て読んで聞く情報は、ひとりひとりバラバラなものになりつつある。

多様な意見との出会い損ない

- 新聞やテレビでは、自分自身で選択できる情報の種類が限られていたので、関心のない情報や記事との偶然の出会いが用意されていた。
- ソーシャル・メディアでは、何を見て何を読み何を聞かかは、ユーザーの「選択」にゆだねられている。
- エコーチェンバー：同じ意見の人々と閉鎖的なコミュニティでの交流を繰り返すことで、特定の信念や考えが強化されていくこと
- インフォメーション・コクーン（情報の繭）：自分にとって心地よい情報や意見にのみ触れ、囲まれている状態を示す言葉

アルゴリズムによる封じ込め

- 自分自身で情報を「選択」しているようなつもりでいて、今日私たちは、アルゴリズムによってフィルタリングされ、お薦めされた情報しか見えなくなっている。
- アルゴリズム：各ソーシャル・メディア・プラットフォームの提供企業が、それぞれのユーザーに適した情報にたどり着くための、最適な計算方法のこと。
- フィルタリング（フィルターバブル）：検索サイトが提供するアルゴリズムによって「見たいだろう」と想定される情報に泡のように包まれ、特定の情報しか見なくなること。

-
- 新しいメディア技術は、市民による公共空間への参加を飛躍的に増加させると同時に、断片化や特定の意見へと人々を封じ込めつつある。
 - 技術そのものの良しあしを問うだけでなく、私たちが新しい技術を「どのように」、「どのような目的のために」利用していくのか、ということを真剣に考えてみるのが重要なのではないか？

3. 「長い革命」のために



-
- 公共性とは、「広く一般の人々、社会に開かれていること、知られていること、利益になること」（第1回）
 - 「多様性がオルタナティブへの自覚に根差した理性的討論を促すもの」であるかどうか（第1回）
⇒オンライン上でのコミュニケーションはどうか？

レイモンド・ウィリアムズ (2020, 223-4)

- テレビの時代に、ウィリアムズはメディア技術について以下のように述べた。

「教養と経験のもとに参加する民主主義実現へ向かう
長い革命の最新の道具であり、複雑な都市産業社会に効率的なコミュニケーションを回復する道具でもある。しかし文脈次第では、短期間で首尾よくことを運ぶ反革命めいた動きの道具にだってなり得る」

「私たちが残りの世紀でどれを選ぶことになるかは大方決まるだろう。しかしもしいま行動が必要だとすれば、それをはじめめるための条件は情報であり、分析であり、教育であり、討論である。」

⇒メディア技術そのものが私たちの社会の行く末を決定するのではなく、それを使う私たち自身がどのようにそれを使っていくのか、ということが重要。

ウィリアムズが述べたことを応用してみるなら、私たちに
とっていま必要なのは、

①必要な情報へのアクセス、②メディア技術やコミュニ
ケーションのありかたについての教育、③平等な立場
であることが十分に保障された人々による討論
ソーシャル・メディアによって形成される空間で、これらを
どのように確保していくことができるのか考えていくこと
ではないか？

次回は具体的な領域から「公共性」を考えてみます。

👉 次回予告「スポーツと公共性」

ご清聴ありがとうございました！

★参考文献・映像

- ポール・ホドキンソン（2016）『メディア文化研究への招待—多声性を読み解く理論と視点』土屋武久訳、ミネルヴァ書房
- キャス・サンスティーン（2020）『#リパブリック—インターネットは民主主義になにをもたらすのか』伊藤尚美訳、勁草書房
- レイモンド・ウィリアムズ（2020）『テレビジョン—テクノロジーと文化の形成』木村茂雄／山田雄三訳、ミネルヴァ書房
- Netflixを視聴できる方はぜひご視聴ください！

『監視資本主義：デジタル社会がもたらす光と影』（2020）

『ブラック・ミラー』第3シーズン第1話「ランク社会」（2019）